

鎌倉シネマワールド

松竹大船撮影所の跡地に作られたシネマワールドという遊園地兼見世物小屋、いま風にいうテーマパークが不人気で十五日には閉鎖されるというので、カミさんと二人で行ってみた。

私は育ち盛りの頃に娯楽といえばまず映画だった世代だからこの施設に興味が無かったわけではないけれど、テーマが寅さんに偏している様だったし、近いからいつでも行けるという気もあって開館以来一度も足を運ばないまま、はや三年経ってしまった。寅さんもいいけれど「国民的映画」などと持ち上げてやたら賞賛するのは気に入らない。それに映画のことをシネマなどと一括する感覚がズレていると思う。活動大写真といわぬだけまじだがシネマだって既に死語である。

二人で三千円払って入ってみてこりゃ駄目だと思った。のっけからお化け屋敷の設定で、破れ障子の中は棺、凄まじい面相の老婆、経帷子の亡霊、襖の血しぶき、卒塔婆、大音量の悲鳴と雷光。これはひょっとして古い見世物小屋のパロディかと疑ったが悲しいことにこれが大真面目である。生首を並べた板の後ろに廻ると板にもうひとつ穴が明けてあって、穴から首を出してください、あなたも生首になれますと説明がある。誰が出すものか。やっと明るい通路に出ると壁に松竹往年の大スターたちのプロマイドやサインが大事そうに掲げてある。この企画を考えた連中は何か勘違いをしているとしか思えない。それとも映画の裏側、総合芸術の舞台裏は実はこんなにもチャチなものだったとそれがいいのだろうか。

順路に従って戸外に出るとはや宵闇が迫っていて、それが幸いして張りぼての旅籠や娼家の建ち並んだ宿場が真に迫って侘しい。これも時刻の助けで生じた濃い陰翳があつてこそその情感で、明るい陽光の下で見たら学芸会の工作としか見えないだろう。丘の上に「本日終了」の札を斜めにかけて遊園地がある。派手な色の回転木馬やてっぺんにペンキ塗りの葱坊主を被ったお伽の国の城が音も無く暮れて行く。これはまさにブラッドベリの世界である。不人気で閉鎖が伝えられて逆に入場者が増えたというけれど、木曜日で閉館間際のこの時間には流石に観客は数人しかない。特徴のある制服を着た従業員の人が多いくらいである。あと五日で失業する彼女たちはここに到っても決められた位置に所在無げに立ち尽くしていて、私達が近づくと礼儀正しく会釈してくれるのが、哀しい。

物置かと思っていたら「幸福の黄色いハンカチ」の炭鉱住宅がある。翻っていた満艦飾のハンカチもちゃんとぶらさがっている。犬小屋のように小さな家に入ってみれば、たらずまいはまさに私達が通り抜けてきた昭和三十年代の貧しかった暮らしそのままに仕上がっている。勿論、懐かしい。しかし映画の価値は画面の中にある。セットとか小道具とかには無い。いくら名優であってもそのサインなどファンでもない私には無意味である。鎌

倉シネマパークの失敗は映画の抜け殻を展示して、その栄光、魔力を再体験させることが出来ると誤解したことがある。

店仕舞いを急ぐ売店のお土産ビデオの中に「幸福の黄色いハンカチ」と「切腹」があった。これがまた懐かしい。「切腹」は昭和三十八年信州小諸で友人と二人で観た。ふたりとも佐久病院のインターンだった。

貧苦に喘ぐ下級武士が竹光での無残な切腹を強要されたあと、老いた父親が豪壮な伊達藩邸に仇討を仕掛ける話だった。話の深刻さと白黒の画面の残酷さとに圧倒されて、一度観たきりなのに三十年経った今も忘れられない。監督、小林正樹。迷ったけれど年齢き気が衰えた現在、見直すとすればハッピーエンドがよかろうと「黄色のハンカチ」を購って外に出る。丁度五時の閉館の鐘が鳴っているところだった。外はトツプリ暮れて建物の外壁にはサイケデリックな電飾の渦、しかし人影はまるで無い。

(五時通信 第二七八号 一九九八年十二月十日)